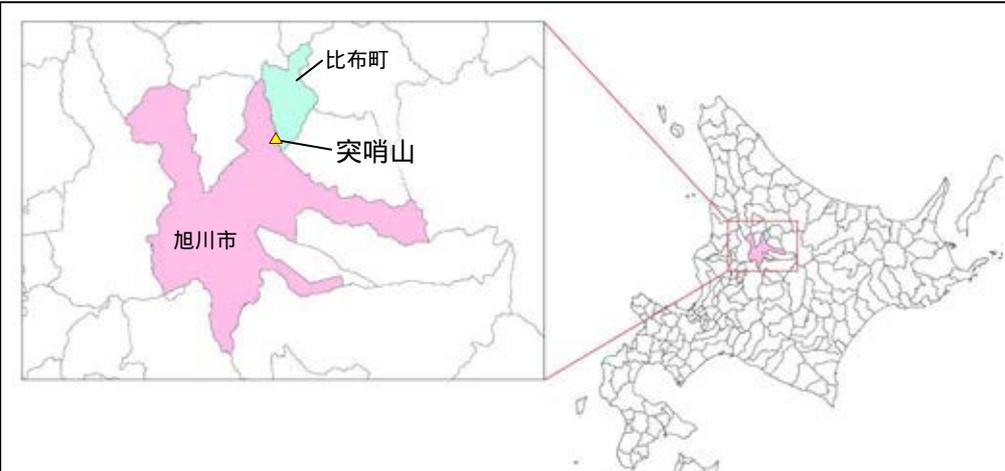
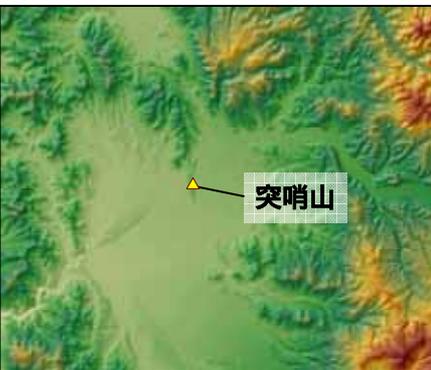
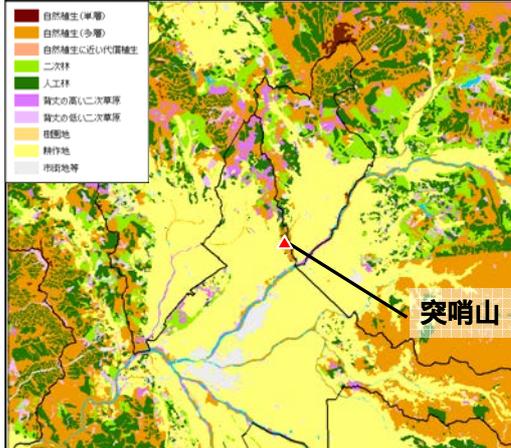
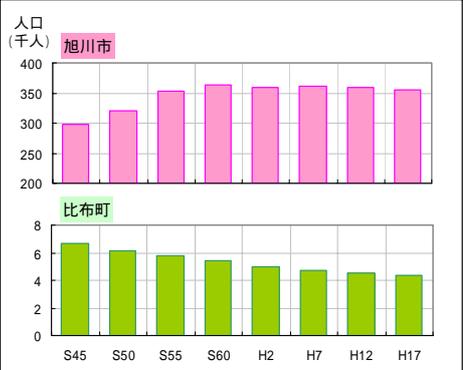
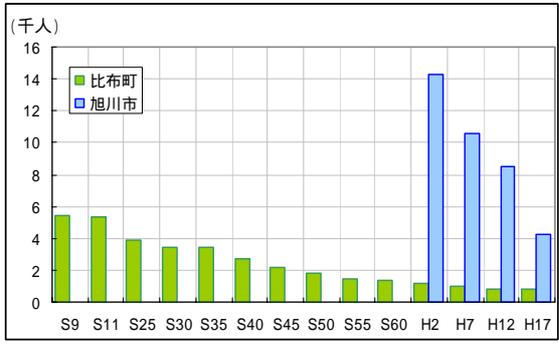


1. 地域の概況 (基礎データ)

1) 地域の地理的・社会的条件

範囲・位置	<p><b>範囲</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>北海道旭川市・上川郡比布町 突哨山とその周辺地域</li> </ul>
	<p><b>位置</b></p> <p><u>北海道の中北部、旭川市と比布町にまたがる都市近郊の里山</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>旭川市の中心市街地から直線距離で約 12km、バスで約 30 分・旭川市と比布町の境界付近に位置する。</li> </ul>  <p style="text-align: center;">図 突哨山周辺の位置</p>
自然条件	<p><b>地形・水系</b></p> <p><u>盆地の周縁部に位置する丘陵地</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>旭川市、比布町ともに上川盆地に位置している。盆地の周縁部は丘陵地や山地となっているが、突哨山はそれらの山地部が盆地内に半島状に突き出した形となっている。</li> <li>上川盆地には多数の多数の河川が存在しているが、その代表的な河川である石狩川が突哨山のすぐ南側を流れている。</li> </ul>  <p style="text-align: center;">図 突哨山周辺の地形</p>
	<p><b>植生</b></p> <p><u>盆地の周縁山地には自然植生が多く残る</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>盆地は概ね耕作地で占められ、中央部に市街地・宅地等が存在する。山地には自然植生が多く残されており、耕作地と自然植生の上に二次林が存在する。</li> <li>突哨山はその地形とともに森林部が半島状に突き出しており、「緑の岬」とも呼ばれる。農耕地に囲まれた、比較的自然度の高い森林地帯となっている。</li> </ul>  <p style="text-align: center;">図 突哨山周辺の植生 (出典：第 5 回自然環境保全基礎調査を元に作成)</p>

社会条件	<b>土地利用</b> <b>市街地と自然植生の残る山地の間を農耕地が占める</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>前記の「植生」で示した通り、盆地は主に農地、山地は自然植生が占めており、自然的土地利用が卓越している。</li> <li>耕作地帯と自然林の境界部分は二次林、人工林、二次草原、農耕地等が混在する土地利用となっている。</li> </ul>
	<b>人口</b> <b>人口は減少傾向</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>旭川市は札幌に次ぐ、北海道第二の都市である。人口は昭和 60 年頃までは増加していたが、近年は微減傾向にある。</li> <li>比布町の人口は昭和 45 年頃から減少し始めており、旭川市と同様、近年は微減傾向にある。</li> </ul> <div style="text-align: right;">  </div> <p style="text-align: center;">図 旭川市・比布町の人口推移 (出典：旭川市統計書、比布町統計書を元に作成)</p>
	<b>産業（主に農林業）</b> <b>水田稲作を中心に発達</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>旭川市では水稻の作付面積が 55% を占め、次いで牧草が 22% となっている。</li> <li>その他、ばれいしょの生産も盛んである。</li> </ul> <b>農業の担い手が減少している</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>旭川市、比布町ともに農業人口は著しく減少しており、特に旭川市では平成 2 年から平成 17 年までに 1/3 に減少している。</li> </ul> <div style="text-align: right;">  </div> <p style="text-align: center;">図 旭川市・比布町の農家数の推移 (出典：旭川市統計書、比布町統計書を元に作成、旭川市は平成 2 年から掲載。)</p>
	<b>歴史・文化</b> <b>かつての多様な利用から再生した雑木林</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>突哨山（とっしょうざん）はアイヌ語で「トゥッ・ソ（Tus-so）」であり、本来は絶壁そのものの意味を指しているが、「突き出た」や「壁」の意味である「Tuk-so」が転訛したとも考えられている。（出典：旭川市アイヌ語地名表示板 HP）</li> <li>突哨山周辺の森林は昔から炭焼き、開墾、スキー場、牛馬の放牧など様々に利用され、その後再生した雑木林である。</li> </ul>

## 2) 生息する主な生物種

<p><b>範囲・位置</b> <b>里地里山に特徴的な生物種</b></p>	<p>植物：カタクリ（<u>N</u>）、エゾエンゴサク、サルメンエビネ（<u>EN,EN</u>）、ニリンソウ、キクザキイチゲ</p> <p>動物：カグヤコウモリ、ヒメホオヒゲコウモリ、エゾクロテン、ヨタカ、コノハズク、クマゲラ（<u>VU, VU</u>）、エゾサンショウウオ（<u>N</u>）、ニホンザリガニ（<u>VU</u>）</p> <p>その他、雑木林に約 1600 種の動植物が生息</p> <p>環境省版レッドリスト：絶滅（EX）、野生絶滅（EW）、絶滅危惧 I 類（CR+EN）、絶滅危惧 IA 類（CR）、絶滅危惧 IB 類（EN）、絶滅危惧 II 類（VU）、準絶滅危惧（NT）、情報不足（DD）、絶滅のおそれのある地域個体群（LP）</p> <p>北海道版レッドリスト：絶滅（EX）、野生絶滅（EW）、絶滅危惧 I 類（CR+EN）、絶滅危惧 IA 類（CR）、絶滅危惧 IB 類（EN）、絶滅危惧 II 類（VU）、希少種（R）、絶滅のおそれのある地域個体群（LP）、留意種（N）</p>
<p><b>主な生物種の生態的特徴</b></p>	<p><b>カタクリ</b>：本州では 3 月下旬から 4 月下旬（突哨山では 4 月中～5 月初旬）に花を咲かせ、6 月中～下旬には種子をつけて 1 年間の成長を終了する。この短い期間に 1 年間の光合成と繁殖活動をすませる。</p> <p>突哨山でのカタクリの大群落を形成してきたのは、過去に人の適度な攪乱による落葉広葉樹 2 次林の成立と林床にササ類の少ないことである。</p> <p>南端の男山自然公園では下草刈りが行われているが、突哨山全体では、林床の刈り払いや落ち葉掻き等はまったく行われたことはなく、自然状態のままで見事なカタクリの大群落が形成されてきた。その主要な条件はクマイザサの少ないことであるが、なぜクマイザサが少ないのかについては分かっていない。</p> <p>125ha ほどにも及ぶ、日本最大級である突哨山のカタクリ群落は地元や北海道では有名であるが、旭川地方には他にも多数のカタクリ群落が存在する。</p>

## 2. 地域における里地里山の保全・活用の取組

### ～ 日本最大級のカタクリ群落の保全を中心とした里地里山づくりの取組～

#### 1) 取組の実施主体・体制

国内最大規模のカタクリ群落が存在する突哨山は、かつてゴルフ場開発の計画があった。この計画に反対し、市民が中心となって「突哨山を考える会」が結成された。会員にはゴルフ場の理事もあり、ゴルフを否定するわけではなく、突哨山にはゴルフ場はいらないの合い言葉で活動が始まった。また、「自然保護団体」という側面は持つものの、それよりも穏やかな市民運動として地道に活動を続けた。長期に亘る活動の結果、旭川市と比布町が自然環境保全を目的として突哨山を公有地化することとなった。

その後は「突哨山と身近な自然を考える会」と名称を変えて活動を続け、平成 20 年には市民、NPO、行政の 3 者による突哨山運営協議会が発足した。協議会は突哨山の自然の保全・活用の基本方針を作り、行政へ提言する。行政はこれに基づき、指定管理者と事業契約、指定管理者が生態系調査、環境教育、市民への情報発信等を市民団体や市民と連携して行う新たなシステムが始まった。

#### 2) 取組の目的・理念

突哨山を開発から守り、市民の憩いの場として活用することを目的として活動を行っている。また、「突哨山運営協議会」に参加し、突哨山の自然の保全・活用の基本方針をつくり、行政への提言を行うこととしている。現在は会員が 400 人程となっているが、会則も会費もなく（随時のカタクリ募金と年間 500 円の郵送料）、穏やかな市民運動として活動を続けている。

#### 3) 取組の経緯

これまでの主な取組の経緯は下記の通りである。突哨山におけるゴルフ場開発の計画が契機となり、「突哨山と身近な自然を考える会」が結成され、地道な活動が行われてきた。近年は、市民、NPO、行政が連携した新たな取組が始まっている。

- 平成 2 年
  - ・突哨山の主要部がゴルフ場開発のために取得される。
  - ・計画の白紙撤回を求めて「突哨山の自然を考える会」を結成。自然観察会やカタクリ講座、お茶の間懇談会、シンポジウム等、自分たちが突哨山の価値を再発見し、市民へ知らせる活動を行う。
- 平成 5 年
  - ・市民実行委員会「カタクリ楽団」による野の花のお花見 第 1 回カタクリフォーラム が始まる
- 平成 10 年
  - ・公有地化を求める街頭署名と全国署名活動を実施、1 年半で市民の 1 割以上 40,676 筆の署名を旭川市へ提出。
- 平成 12 年
  - ・9 年間の活動が実り、旭川市及び比布町が自然環境保全を目的に約 151ha を買い取った。
  - ・「突哨山の自然を考える会」が「突哨山と身近な自然を考える会」に名称を変更。
- 平成 20 年
  - ・市民、NPO、行政による「突哨山運営協議会」が 2008 年 4 月に発足し、新たな取組が始まる
- 平成 21 年
  - ・第 17 回カタクリフォーラム・第 7 回全国カタクリサミット in あさひかわでフォーラム「北海道の里山を考える会」他を共催で実施予定

## 4) 取組の主な内容

突哨山では、市民、NPO、行政等が連携した新たな取組が始まったところであるため、ここでは「突哨山と身近な自然を考える会」の活動について紹介する。

自然観察会  
調査活動  
カタクリ募金

### 自然観察会

#### 主な取組内容

- ・突哨山の四季の自然に応じた観察会を実施。
- ・春は「カタクリ楽団」が主催のカタクリフォーラムに協力し、カタクリ講座、野歩き、フリーマーケット、紙芝居等を実施。参加者と共に野の花のお花見を楽しむ。カタクリフォーラムは平成21年度で17回目の開催となり、息の長い活動となっている。
- ・カタクリ講座では、「身近な自然の話」、「カタクリの自然史」、「アイヌの自然観」等の講座を開催した。
- ・平成21年4月には毎年のイベントに加え、北海道の「里山」を考える というフォーラムを、各地で行われている「全国カタクリサミット」と共催で行う予定である。
- ・6、7月の夜には小型のフクロウ・ブッポウソウ(コノハズク)の声を聴く会を開催する。空を飛ぶコウモリを観察することもできる。
- ・秋には芋煮会を実施。毎年恒例となっている。
- ・冬はかんじきツアーを実施。

### 調査活動

#### 主な取組内容

- ・分野ごとに7つの作業班を設定し、調査活動を実施。
- ・作業班は「歴史班」、「野の花班」、「ザリガニ班」、「森林班」、「ササ調査班」、「帰化植物班」、「フィールドマップ作成班」の7つとなっており、突哨山の歴史と自然の調査を行ってきた。
- ・調査の成果は、平成14年に「調査中間報告」としてまとめ、平成17年には機関紙の突哨山通信27号にて「緑の岬・突哨山からの提言」としてまとめた。

### カタクリ募金

#### 主な取組内容

- ・「カタクリ募金」と称した募金により資金を集め、平成16年には突哨山の麓の一部を買い取り、カタクリ広場とした。駐車場、トイレ、四阿、ビニルハウス棟を整備し、自然公園という側面もあり利用客が多数訪れる突哨山の健全な利用に貢献している。

### 3 . 取組による成果

#### 1) 里地里山の土地利用・管理の効用

##### ゴルフ場予定地から自然環境保全を目的とした公有地化へ

- ・市民の長年にわたる活動により、行政が突哨山の買い取りを決断し、公有地化することで開発の危機から免れた。突哨山は現在では旭川地方の貴重な緑地として市民、町民の憩いの場となっている。

##### 北海道における「里山」の普及啓発の効果

- ・活動を始めた当初は突哨山はほとんど知られていなかったが、現在は春の風物詩として多くの人に知られるようになった。目に見える美しい景観は、市民に対してその価値を訴えやすい。市民が、大雪山や石狩川のような北海道を代表する自然とは違った、身近にある自然を見直すきっかけとなっている。また、多くの人を訪れるようになってからは、散策マナーの周知など、突哨山の健全な利用についても貢献している。
- ・調査活動によって突哨山には 1600 種ほどの動植物が生息・生育していることが確認されており、生物多様性の観点からの突哨山の価値も明らかにされつつある。

表 突哨山における里地里山の土地利用・管理の主な効用

項目	過去からの土地利用・管理で培われてきた効用	近年の取組を通じて再生・獲得された効用
1. 生物多様性保全(生物種・生息環境・土地利用)	・様々に利用され、管理された雑木林にはカタクリの大群落が形成されると共に、多様な生物の生息地となっていた。	・調査や観察会等を通じて、動植物に関する知見が蓄積されている。 ・開発の危機にあった希少野生生物の生息地が保全され、その後も生息地が維持されている。
2. 資源の持続的利用・生態系サービス(水・食料・生産物・気象・土壌・エネルギー・廃棄物・CO2)	・盆地に半島状に突き出した森林は、昔は炭焼きや放牧等、多面的に利用されていた。	・現在は、地下水や沢からの水を麓の農家、数戸が飲み水や畑に利用している。
3. 人間の福利への貢献(人口増減・平均寿命・健康度・幸福度・郷土意識・相互扶助・快適性・自然認識)	・以前は、秋のキノコや春の山菜採りに利用されていた。	・観察会やフォーラム等の取組を通じて、市民の身近にある自然の価値や保全の必要性について、関心や理解が高まっている。
4. 歴史・文化の継承	・アイヌの 悪い穴 の伝説、男山神社「福地来」の歌碑、「山の神」の石碑、先端の石灰岩の採掘(昭和 40 年代初めまで)等がある。	・都市周辺の貴重な緑地として、市民に憩いの場を提供している。

#### 2) 外部評価

##### 突哨山の自然環境が高く評価されている。

- ・日本では最大規模のカタクリ群落を有する突哨山は、特に北海道では有名であり、春の風物詩となっている。カタクリのほかにも季節ごとに様々な花が咲く。春には多くの観光客が訪れるが、他の季節の利用者はまだ少ない。また、旭川市においては、都市周辺の貴重な緑地であり、市民の憩いの場となっている。

## 4 . 今後の課題

---

### **多様な主体の連携による生物多様性の質を高める管理目標・手法の確立**

- ・突哨山では、市民等による活動が実を結び、公有地化により森林が保全されるとともに、意欲的な調査により二次的自然としての価値が明らかにされているが、将来的な植生管理目標や手法は現在、市民を交えて検討中である。
- ・平成 20 年には、市民、NPO、行政、指定管理者の連携による「突哨山運営協議会」が発足したことから、こうした多様な主体の連携により、新たに選定された有能な指定管理者「NPO法人森林再生ネットワーク北海道」による生物多様性保全等の効果について調査や検証を行い、質の高い植生管理の目標や管理手法の確立に結びつけていくことが予定されている。

### **里地里山の環境保全と適正な利用の両立**

- ・突哨山は、ゴルフ場開発の危機からまぬがれ、今では北海道の春の風物詩として有名になった。様々な花が咲き乱れ、目に見える美しい里山の光景は、一般住民へ里山の生物多様性の価値や保全の必要性を訴える効果があると思われる。
- ・一方、春には多くの人々が訪れるようになったことで、利用過多による生物多様性の損失の可能性が考えられるようになった。今後は、訪れる人たちの管理ではなく、来訪者へのマナーの周知も含め、里山の利用と保全の両立を市民と共に良い方向への誘導を図る必要がある。